中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第20巻 第１号（2021）12－14頁

中京大学心理学部での学び

――心理学の基礎と応用――

宮崎　由樹

私は2002年に中京大学心理学部に入学しました。その後，大学院心理学研究科の修士課程，首都大学東京大学院博士後期課程，中京大学心理学部助教などを経て，現在は広島県東部の福山市にある福山大学人間文化学部心理学科にて，認知心理学・産業心理学を専門とする教員として勤務しています。中京大学心理学部の３期生として入学したのが今から18年も前のことと考えると，月日の経つ早さになんとも形容しがたい気持ちになります。

当時の大学近辺の街並み（2006年 卒業アルバムより）

なぜ大学で心理学を学ぼうと思い立ったのか，なぜ中京大学心理学部への進学を決めたのか，そのきっかけは今となっては記憶が曖昧です。私が高校生だった頃（1990年代後半から2000年代前半），世間は心理学ブームで，科学的・学術的ではない心理学（いわゆるポピュラー心理学）も含めて，各種メディアで心理学がよく取り上げられていました（2004年から現在までの Google 検索のインタレスト推移をみると，恐らく昨今よりもっと？： https://osf.io/xgvam）。このような世の中の関心の高まりに流され，心理学に興味を持ったのかもしれません。また，数ある大学の中で，中京大学心理学部への進学を決めたのも，「日本で初めての心理学部」という言葉につられただけのようにも思います。いずれにせよ，何か立派な動機・理由があって入学したわけではないことだけは確かです。

そんなわけで，今回，心理学部創設20周年を記念するエッセイ執筆をご依頼いただいた当初は，私よりもっと適任の方がいらっしゃるのではないか……と大変恐縮しました。しかし，編集委員の先生にせっかくお声がけいただいた機会でもありますので，今回の執筆を畏れ多くもお引き受けさせていただきました。

さて，最初のきっかけはどうあれ，中京大学心理学部での学びは私にとってかけがえのないもので，私が現在大学教員として教育・研究を行う際の基盤となっていると感じます。４年間の学びで印象深い授業はたくさんありましたが，特に記憶に残っている授業を２つ挙げたいと思います。一つは，入学早々に受講した「発達心理学概論」です。当時，古澤頼雄先生と小島康生先生がご担当されていたこの授業は，英語・日本語併用で実施されていました。英語の PowerPoint 資料を使って行われる授業は高校までは全く考えられなかったことで，「大学の授業って凄いんだなぁ」「（２号館の教壇に立たれる姿を見て）かっこいいなぁ」と素朴に思ったこと，ワクワクしたこと，そして心理学を４年間学ぶことに対して高く動機づけられたことを今でも鮮明に記憶しています。もう一つは，牧野義隆先生がご担当されていた「認知心理学特講」です（ひょっとすると授業名が微妙に違っているかもしれません）。講義の中で，牧野先生が，認知心理学に関する研究論文の紹介を通じて，ある時代では有力と考えられていた仮説が覆されていくことの実例を紹介されたり，ある先行研究におけるサーベイの甘さを指摘されたりするのをみて，科学の発展といいますか，研究者（学者？）の姿といいますか，とにかく巨人の肩の上に立つことの意味を目の当たりにして，得も言われぬ感動を覚えました。また同時に，ひとつの理論・ひとつの知見を盲信することの危うさ，批判的に・慎重に物事を考える態度の大切さを学ぶことができました。その他にも「現代心理学の諸領域」「心理学基礎実験演習」など，思い出深い授業はたくさんありますが，心理学部の先生方の授業はどれも確かな知識に裏打ちされた内容で，教授方法としてのフレッシュさ・きめ細かさを伴い，批判的に物事を考える態度を

養うことを考えた授業であったと思います。私が大学教員として教える側にたった今，自身の教育方針に迷いが生じたときには，当時の先生方の授業を思い返すことがよくあります。

印象に残った授業として発達心理学領域の古澤先生や小島先生，実験心理学領域の牧野先生の授業を挙げておいてなんですが，私は中京大学在学中には応用心理学領域の和氣典二先生の研究室（ゼミナール）に所属していました。大変失礼なことですが，入学理由と同じで和氣先生の研究室を志望した理由はあまりよく覚えていません。当時，和氣先生と同じく応用心理学領域の教員であった神作博先生や向井希宏先生の研究室と志望を迷った記憶はありますので，応用心理学全般に興味を持っていたのだとは思います。当時としては貴重だった眼球運動測定装置（SR Research 社の EyeLink Ⅰ）を用いた心理実験の被験者として参加したことで「何か面白いことが出来そうな研究室」と感じたこと，和氣先生の温厚な人柄に惹かれたことが最終的な決め手だったようには思います。

私が紹介するまでもないことだとは思いますが，和氣先生は，工業技術院産業工芸試験所（のち，製品科学研究所，産業技術総合研究所），宇都宮大学，東京理科大学を経て，1999年に中京大学心理学部に着任されました。人間工学や感覚代行（何らかの原因で衰えた／失った感覚をその他の健常な感覚系を使って代行すること）に関する応用研究にも長く携わられてきた先生として知られていますが（和氣，1988），もともと感覚・知覚心理学をご専門として活躍されてきました（例えば，Alpern & Wake, 1977）。クギを打てるような分厚さの『新編 感覚・知覚心理学ハンドブック（誠信書房）』の編者としてもよく知られています。このような確かな基礎心理学の知識や方法論をバックグラウンドに，工学専門の先生方と協同で感覚代行機器の設計等の応用研究にも精力的に関わられていました（詳しくは，和氣，2005）。

和氣典二 先生
（2006年 卒業アルバムより）

私の研究のビジョンは，この和氣先生の研究スタイルに強く影響を受けています（厳密にいえば，首都大学東京に進学してからの恩師でもある市原茂先生からの影響も強いです（市原，2013）。ちなみに市原先生も，1981-1991年まで中京大学文学部心理学科応用心理学分野の教員でした）。私は研究においては，研究のアイデアを基礎的な研究の中だけに求めるのではなく，現実場面や社会問題の中に求めることを常に意識しています。具体的には，研究を通じて日常社会における課題・問題の解決を図ると同時に，基礎研究で得られた知見や理論の汎用可能性を検証する研究を実践してきました。近年では企業の研究開発職の方々と協同して，心理的付加価値の高い魅力的なものづくり・サービスに資する研究も展開しています（例えば，宮崎他，2019）。こうした心理学の基礎と応用の両輪を意識しながら研究を行う姿勢は，中京大学心理学部，そして和氣研究室で培われたものです。

また，授業や研究室に限らず，大学での日常の全ては学びに満ちていました。例えば，先生方や大学院の先輩方との交流の時間も，いま振り返ってみると貴重な学びの場でした。当時は3号館の外階段に喫煙スペースがあり，そこで先生方・大学院の先輩方がタバコをふかしながら研究の話をされていました。私自身は喫煙者ではありませんが，研究の相談や雑談をするためによくそのスペースへ顔を出し，多くの刺激や薫陶を受けました。そういった日頃の交流の中で教えてもらった Donald Broadbent の “The necessity for some relevance to real life is a worthwhile intellectual discipline.” という言葉（Broadbent, 1971, p. 4）や Ulric Neisser の講演での “The challenge will be to shift from testing hypotheses for their own sake to using them as tools for the exploration of reality.” という言葉（Neisser, 1999, p. 16）は，心理学の基礎・応用研究を進める私にとっての金言で，研究者人生で今後も大事にしつづける言葉になると思います。

中京大学が文学部心理学科を改組，独立させて心理学部を創設した際の目的は，「新しい時代に対応する心理学の総合的一貫教育を行うこと。そして，現代社会が必要とする人材を育成すること。」であったそうです（『中京大学広報 第118号』より）。このようなビジョンに基づく中京大学心理学部における基礎から応用までの総合的な心理学の学びは，私の教育・研究観の形成過程で大きな意味を持ちました。恩師である先生方にくらべるとまだまだ

力及ばずの所が多いですが，現代社会で活躍できる後進の育成に私も励んでいきたいと思います。そして，私自身もまた，心理学および社会の発展の担い手となれるよう今後も研鑽を深めていきたいと思います。

Alpern, M. & Wake, T. (1977). Cone pigments in human deutan colour vision defects. *The Journal of Physiology*, *266*, 595–612.

Broadbent, D. E. (1971). *Decision and stress*. London: Academic Press.

市原　茂（2013）．心理学との45年間を振り返る――心理学の基礎研究と応用研究の両立を目指して――．人文学報，No. 470, 1–10.

宮崎　由樹・神山　龍一・三宅　大輔・河原　純一郎（2019）．ウェットティッシュの取り出しやすさが製品の印象や製品選択に及ぼす影響．人間工学，*55*, 145–154.

Neisser, U. (1999). Memory: What are the important questions? In U. Neisser & I. E. Hyman, Jr. (Eds.), *Memory observed: Remembering in natural contexts* (2nd ed.), (pp. 3–18). New York: Worth Publishers.

和氣 典二（1988）．感覚代行研究の現状．人間工学，*24*, 137–142.

和氣　典二（2005）．触覚研究に携わって――ヒューマンインターフェイスとしての感覚代行研究――．中京大学心理学研究科・心理学部紀要，*4*, 77–83.

（福山大学人間文化学部）